

クーベルタンの求めた理想郷

木村佳司

第7回アジア冬季大会 2011年1月31日-2月6日 カザフスタン国アルマトイ市



スキーオリエンテーリングに参加した各国選手と役員が一堂に集まって記念撮影。(国別対抗リレー表彰式後)
競い合った我々は皆仲間だ。国際オリエンテーリング連盟からの提案で実施された。

アジア大会、オリンピックは各国が威信をかけて競い合う。それは素晴らしい。だがもっと大事なことは参加することだ。

2011年1月31日-2月6日
第7回アジア冬季大会
カザフスタン共和国アルマトイ市

総合国際スポーツ大会の目的

クーベルタンが100年以上前に提唱し実施されてきた近代オリンピック。その時に言われたことは「オリンピックは参加することに意義がある。」

各国代表が全力で競い合うことは素晴らしい。しかしそれ以上に重要な事は大会に参加してスポーツレベルでの国際交流を図ることだという意味である。この大会の間だけは国同士の紛争を止め、事情の違いこそあれお互いに血の通いあった人間同士であることを再確認する。これら民間交流を通じて国際の相互理解を深め、紛争を防止する。オリンピック当初の目的はそんなところではなかっただろうか。

カザフに観た理想郷

今回行われた第7回アジア冬季大会はこの総合国際スポーツ大会の理念に近い競技会だったように思う。

上位でつばぜりあいを見せる国があ

るいっぽう、どんなに全力を尽くしても上位を競い合うことすらできない国も競技に参加し、カザフスタンの観衆の前でそのひたむきな姿を見せていた。

モンゴル、インド、キルギスタン、イランなど決してスキー競技では勝てない国にも、観衆は競技に参加してくれたその国に敬意を表し、大きな声援で参加を歓迎していた。カザフスタンの観衆は彼らを遠来の友人と感じただろう。

そこに観たのはクーベルタンが目指した理想郷だった。

日本での捉え方

スポーツ報道の常として、報道は勝者に限定される。それ自体は正しい。

参加側も報道されるだけの結果を出さないと参加意義が問われるように思われる風潮があるように思われる。

日本オリンピック委員会も国からの支援を受けて選手を派遣する以上、日本国民への説明責任がある。そこである程度の結果を出せる種目しか今回は派遣していないように見える。

各国の参加状況

だがスキーオリエンテーリング種目に限ってみると、日本流の派遣方針と他国の派遣方針は少し違うように思える。

今までスキーオリエンテーリングの世界選手権に毎回選手を出している国はカザフスタンと日本だけ。中国、モ

ンゴル、韓国、イラン、キルギスタンがスキーオリエンテーリングの国際大会に出場するのは今回が初めてなのではないだろうか。

そういった国々では「参加することに意味がある」と捉えて、選手が集まるならどんどんアジア冬季大会に参加させているように思えた。

視察団に対する反応

主催国であるカザフスタンこそが本当に日本に参加してもらいたかったと思う。特に実際に競技を受け持ったカザフスタンオリエンテーリング連盟と国際オリエンテーリング連盟は残念に思っているに違いない。

しかし、日本の競技団体はこの大会を無視しているわけではないことが、3名の視察団派遣で判ってもらえたと思っている。

スキーオリエンテーリングの取材に訪れるカザフスタンのマスコミ記者に「なぜ日本は参加していないのか？」と何度も説明を求められた。一通り説明するのだが、最後には「理解できない」と何度も同じコメントが返ってきた。

(木村佳司)